

## 北但大震災後の大火からの復興過程における地域空間形成と「近代」

-兵庫県豊岡市の円山川流域の豊岡・城崎・津居山・飯谷を対象として

A Study of the History of Regional Spatial Formation in the Process of Reconstruction from the Conflagration of 1925 North Tajima earthquake: Toyooka, Kinosaki, Tsuiyama and Handani in the Maruyama River Basin, Toyooka City, Hyogo Prefecture

関西学院大学建築学部 准教授 石樽督和

### （研究計画ないし研究手法の概略）

1925年に発災した北但大震災では、現在の兵庫県豊岡市に位置する円山川流域を中心に甚大な被害が出た。なかでも豊岡（旧豊岡町）、城崎（旧城崎町）、津居山（旧港村）、飯谷（旧内川村）では火災が発生し、市街地の多くを焼失した。この4地区は、県と自治体の方針が一致し近代都市計画と不燃建築による復興が行われた豊岡、県の計画した防火建築帯を嫌って、基盤整備をしながらも木造の町並みで復興をとげた温泉街の城崎、埋立と基盤整備を行いながら地域の特徴的な家屋で町並みをつくった港町の津居山、基盤整備は行われなかったものの家屋に筋交が入り、軒を土で覆うなど防災性能を高めた家屋を建設していった農村の飯谷というように、同じ災害を受けた同じ県内の地区でありながら、それぞれに特色を持った風景を復興のなかでつくり上げてきた。

本研究では対象4地区の市街地の形成過程を、①豊岡市立歴史博物館所蔵の都市計画関連史料の分析と、②現地でのフィールドワークによる建物のタイポロジーと都市組織の読解から復元的に明らかにする。本研究では、特に豊岡と津居山を中心に研究を行った。

### （実験調査によって得られた新しい知見）

#### 1. はじめに

2025年で発災から100年を迎える北但大震災は、現在の兵庫県豊岡市の円山川流域に大きな被害をもたらした。大火の被災地はいずれも地域と「近代」がいかに関係し合いながら20世紀の日本の地方の都市的な場が形成されたのかを考察する上で、格好の対象である。

注目すべきは、対象地区がその後に大きな自然災害や戦災を受けていないため、約100年前の災害復興で生まれた地域空間（復興空間遺産）が色濃く残されており、築100年に迫る建物が対象地区には遍在していることである。

#### 2. 豊岡（旧豊岡町）における北但大震災後の復興復興計画

旧豊岡町では北但大震災による倒壊や焼失で、総戸数の86.6%に及ぶ1,887戸に被害が及んだ。復興にあたって旧豊岡町は、震災以前からの都市計画の方針「大豊岡構想」を震災復興でより積極的に進め、主要道路の拡幅と、シビックセンター（中央官庁街）の建設を行った。

シビックセンターは各所に散在していた行政施設などを大開通のほぼ中央の北側の街区に集中させた。豊岡町役場を取り囲むように、警察署・郵便局・税務署・消防事務所及び警

鐘台が並んでいた。消防事務所を除いて全て RC 造で、町役場の塔屋からの眺めは「眺望絶佳、遠近ノ山川歴々弁スベシ」と絶賛された。

道路拡幅については、大開通り及び元町筋の県道の幅員を 2.3 間拡げて 6.5 間 (11.8m) にして両側を歩道とし、寿公園を中心に東西へ伸びる道路を 4.2 間から 5.2 間 (9.5m) に、シビックセンター西側の道路も大開通から寿公園に至る間を 5.



図 1 豊岡の復興計画図の一部をトリミングし加筆。豊岡市立歴史博物館の伊地知家文書所蔵。

2 間にひろげ片側に歩道を付けた。また、大開通りに並行する南側の道も同様に拡幅している。さらにこうして拡幅した道路のうち、県道沿いを防火帯とすべく道路幅を拡幅したうえで面路部への耐火建築の建設を、補助制度をもって推奨した。図 1 は、豊岡市立歴史博物館の伊地知家文書に所蔵されている豊岡の震災復興計画を示した図面である。オレンジ色に囲まれた建物は補助制度によって耐火建築として建設されることが計画されていた建物であると考えられる。こうした耐火建築が分布しているのは大開通りと、それに直行する元町筋であることがわかる (一部、大開通りの一本南側の生田通りにも民間耐火建築は建設された)。

### 復興後の本建築のタイポロジー

復興都市計画が行われた豊岡では、端的に示せば、図 2 のような本建築が復興期の豊岡には建設された。

まず復興期に本建築として建設された建物は、公共建築と民間建築に大別される。民間の建物は施主の経済的条件、考え方によって多様な現れ方をしたが、復興期の豊岡の公共建築はそのほとんどが耐火建築 (RC 造) として再建された (公共復興建築)。

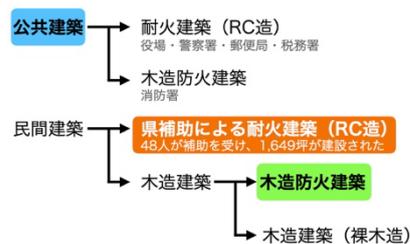


図 2 復興期の豊岡に建設された建物を建設主体と構造種別、補助制度の有無から分類した図。

続いて民間建築は、耐火建築建設のための補助を受けて建設された民間耐火建築と、補助を受けていない木造建築があり、木造建築はさらに塗屋造となっている木造防火建築と、真壁で立面が造られている裸木造に分類できる。民間耐火建築は、震災復興期に兵庫県の建設費補助制度「防火家屋建築費補助内規」を用い民間によって建築された 48 軒の RC 造建築である。木造防火建築は、震災復興期に建設された木造建築物のうち、塗家造りや軒裏への防火処理、袖壁の設置など防火、防災を意識した意匠が見られるものである<sup>1</sup>。

公共復興建築の多くは大開通りのほぼ中央に設定されたシビックセンターに建設された。シビックセンターの公共復興建築は 1928 (昭和 3) 年までに再建されている。シビックセンターの設置は当時の兵庫県地方技師・置塩章の欧米都市計画案を骨子として計画したと記録されている。中心となった豊岡町役場は神戸の建築家・原科準平による設計であり、施工は同潤会渋谷アパートなどを手がけた大阪橋本組が請負った。また、豊岡尋常小学校の講堂 (除却済み) も町役場と同じく原科の設計によって RC 造で建設された。

北但大震災からの復興に際して兵庫県は「関東及び北但震火災の結果に鑑み、将来に備えるため」として、新築家屋を RC 造によって建設するものに対し、建設費の補助を行う旨を

<sup>1</sup> 耐火建築建設のための補助制度を受けずに建設された民間耐火建築があったかどうかは、現状は不明である。今後、精査が必要である。

豊岡城崎両町に通達した。これを受け豊岡町は、県道であった大開通り及び元町筋の大部分を「悉く防火家屋と為さんと欲し」、面路部の不燃化を町の百年の大計であるとして推奨した。補助額は建築延べ面積一坪につき 50 円であり、これは木造と RC 造の差額に値するとされ、工事竣工検査の後に支給された。この制度を 48 名が用い、1649 坪あまりが建設されたと記録に残る。兵庫県の「防火家屋建築費補助内規」は全 13 条から成る。外壁及び屋根を RC 造の耐火構造とすることが定められ（第 1 条）、申請にあたっては一般図に加え強度計算書や配筋図の添付が必要とされていた（第 3 条）。これらの規定は市街地建築物法（1919 年施行）に準拠するものとされており（第 12 条）、当時は 6 大都市圏にのみ適用されていた法律と同等の基準で建設されている。

こうした最新技術としての RC 造の建物が復興建築として立ち上がっていったが、量的に見ればあくまでそうした建物はごく一部であり、復興期以降の市街地は瓦屋根を葺いた勾配屋根をもつ木造建築によって覆われていた。つまり黒々とした勾配屋根の木造建築の海の中に、白く輝く耐火建築がポツポツと浮かび上がっているような景観であったと考えられる。

### 復興建築の分布

図 3 は 2023 年時点で確認できる復興期に建設された公共復興建築、民間耐火建築、木造防火建築の分布を示したものである。図 3 で示した青の公共復興建築、橙色の民間耐火建築、緑色の木造防火建築は、それぞれ図 2 で同色の部分に該当する。

現在確認できる民間耐火建築は当初建設された 48 軒のうち 35 軒であり、13 軒は除却されたものと考えられる。また、35 軒のうち空き家となっているものは 1 軒であり、34

軒が住居、店舗あるいは店舗併用住居として利用されている。シビックセンターに建設された公共建築は、その後市内各所に分散移転し、現在では市役所の一部として旧町役場が残るだけである。

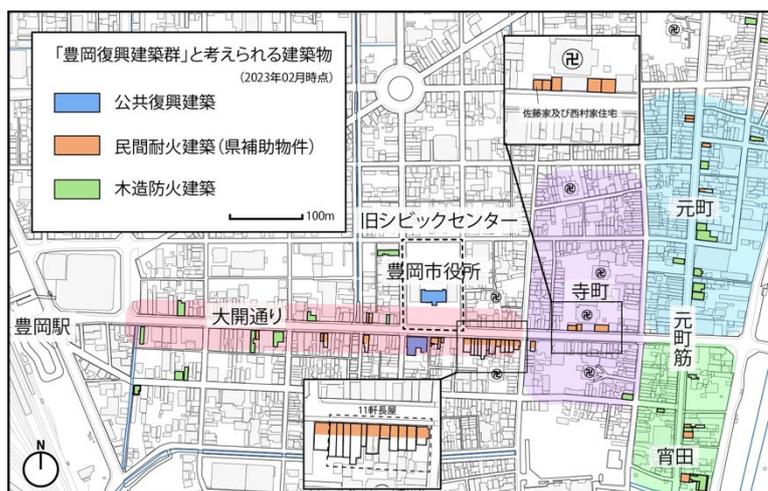


図 3 復興期に建設された公共復興建築、民間耐火建築、木造防火建築の分布。

### 3. 北但大震災以前・以後の津居山の集落空間と建物

津居山は、現在の兵庫県豊岡市の中心部を流れ日本海へと注ぐ円山川の河口に位置する港町である。津居山港は、現在の兵庫県北部の但馬における第一の港として近世から栄えた。津居山港は集落で言えば、津居山、瀬戸、小島、気比、田結の 5 つに囲まれている。

#### 北但大震災以前の津居山

北但大震災復興によって津居山は、18 世紀半ばから明治中期にかけて廻船業で賑わった空間から大きく変化を遂げることになる。

図 4 は地元の方が 1939（昭和 14）年 10 月に北但馬地震以前の津居山を復元的に描いた地図である。津居山の集落は、2 つの谷戸と山裾に形成された集落であり、八幡神社の麓から東が大火で焼失したことがわかる。1908（明治 41）年 3 月 10 日の津居山を海から撮影した写真史料からは、集落の東側沿岸部には妻側を海に向けた土蔵が間隔を開けながら並んでいることが確認できる。その間は船揚げ場になっている。この蔵は浜蔵と呼ばれる廻船問屋

が物資の収納保管に使用していた蔵であった。震災前は道幅が狭く、山の中腹、谷間、裾に住居が密集。「高低、起伏のある段々屋敷であった」。屋敷は12坪以下が62戸、その他は概ね16坪から18坪。震災後は最低30坪。宅地規模が大きく拡大した。震災では250戸あった津居山の家のうち145戸が焼失、68戸が全壊、37戸が半壊している。

### 北但大震災後の復旧・復興

津居山では震災1週間後に照満寺境内で村の総会が開かれ復興計画が発表・決議された。復興計画は、約5,000坪の海面の埋め立て工事、水道と下水溝の設置、共同の船揚げ場の設置、家屋の建設の4点である。円山川の土砂堆積で津居山港は港としての機能が低下しており、明治期から改築の計画は常に立ち上がりながら実施されていない状況が続いていた。震災復興はそれを進める契機でもあった。そしてこの復興



図4 北但大震災以前の津居山を描いた地図に加筆。津居山公民館所蔵。

計画実施の条件を、向う三年間本建築をしないこと、焼失家屋の宅地の土地は全部村で買収すること(台帳面積による)、その価格は後に協議することとし、また埋め立て土地整理後に村より提供する宅地の価格と買収価格とを同一にすることとした。この復興計画は県が主導したものと考えられるが、その詳細が明らかになる史料は管見の限り見当たらない。復興事業による工事は約52,000円の予算(国庫貸付、5か年据置、25ヶ年年賦償還)で順調に進み約3年で完了した。土地整理後の屋敷は30坪から35坪の広さを最低として、価格・坪当たり最高35円、最低3円で分譲された。震災後の家の大きさ(建坪)は一部の例外を除き大差なく平均20余坪までを普通とした。屋敷と建坪の面積を増やすことができたのは埋め立てを行ったからである。

図5は震災以前・以後の津居山を重ねて示した「津居山区趨勢地図」である。埋め立てによって海岸線が移動し、沿岸部は防波堤を持った共同船揚場になった。また段々状になっていた集落の地形も、埋め立てによって緩やかな連続的な斜面へと改変された。防災的な面言えば、山の上に位置する権現宮や八幡宮への参道が付け替えられ、避難路をかねるように新しい道路の末端に位置付けられた。

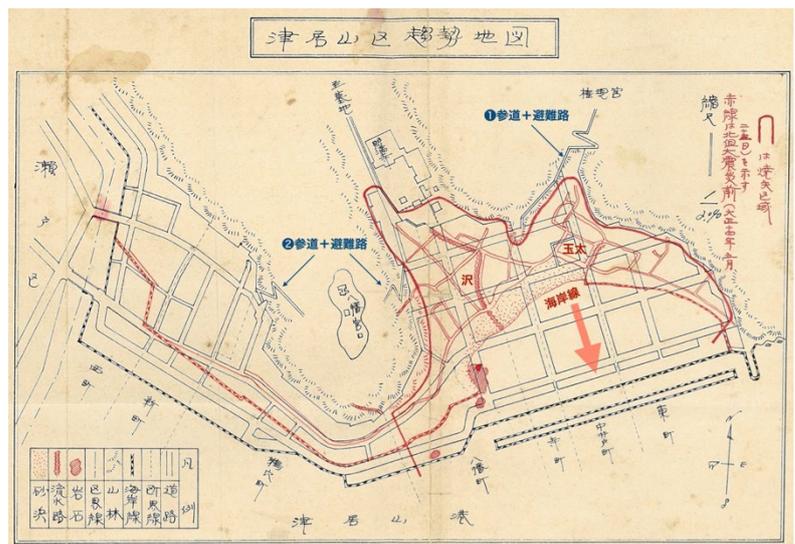


図5 津居山区趨勢地図。津居山の震災以前(赤)・以後(黒)。豊岡市立歴史博物館「港村誌文書 五 絵図」に収載。

「津居山区趨勢地図」のように震災復興した津居山の集落空間で、土地整理がどのように行われたのか、復原した。現状の屋号がわかる136の家うち、62の家が区画整理以前・以

後の換地による移動を把握することができた。

特筆すべきは、「玉太」という屋号で震災以前から集落の中心に道に囲まれ独立した屋敷を持っていた家の換地である。玉太の土地は原位置に換地され、土地整理後は唯一道に囲まれた独立した屋敷となっている。この玉太は 1738（元文 3）年に照満寺が全焼した際に、再建費用を全額出すと申し出ていることから、18 世紀頭には津居山で有力な家となっていたと考えて良いだろう。

その他、共同井戸は土地整理の前後でも位置は変わらず、集落のインフラとして持続していることがわかる。また、復興計画では下水溝の設置が挙げられていたが、これは街区の中央、屋敷の背割り線に宅地境界を中心に敷設されている。この下水溝沿いを路地として細い空地が抜けており、家は背割り線からセットバックして建っている。これには建築線が設定されている可能性があるが、裏付けができる史料は残されていない。

北前船の寄港地、そして船主や船問屋も多く存在した津居山港に位置する津居山の北但大震災前後の集落空間の変化を明らかにした。震災以前は廻船問屋の浜蔵が沿岸に並ぶ特徴的な景観を持っていた集落が、震災後には浜蔵を持たなくなった。その過程でも集落に中心に位置する玉太は象徴的な位置を占め続けていた。震災以前には茅葺の家屋も存在したが、震災後の土地整理後の屋敷には木造二階建て切妻平入の建物が建設されている。1 階の階高が低く、1 階も 2 階も開口部の大きな開放的なファサードを持った建物で、津居山の特徴的な建物類型と考えられる。居住者からは、震災後の建物は 1 階の階高が低くなっており、それは耐震のためであるとの証言があった。

#### 4. おわりに

本研究が対象とする 4 地区では、北但大震災後に兵庫県が「近代的」な復旧・復興を主導しながらも、実際には地域の空間的、社会的性質の違いにより、災害後には異なる風景が現れ、現在までその性質は持続している。ここでは特に豊岡（旧豊岡町）、津居山（旧港村）でのフィールドワークと史料調査から明らかになったことを示した。

豊岡では復興期に建設された本建築を建設主体と構造種別から整理し、特に豊岡の復興建築として特徴的な公共復興建築、民間耐火建築、木造防火建築について中心部での現存建物の分布を示した。民間耐火建築については、県の制度によって建設費に補助を受けたのが 48 名（軒）、1,649 坪であり、このうち 35 軒が現存していることを明らかにした。

この民間耐火建築については、大開通りと元町筋という市街の中心通りである県道沿いにはほぼ分布が限られていることを明らかにした。これは復興計画が、道路拡幅によってシビックセンターが位置する大開通りを市街の中心街路として直線上に通した上で、沿道に不燃化した近代建築を建設していくことで、震災以前から町が目指していた近代的な都市景観創出をさらに推し進めようとしたためであったと考えられる。さらにこの民間耐火建築物は、大開通り沿いと元町筋沿いで現れが異なっていた。すなわち大開通り沿いでは建物の共同化が進み、RC 造長屋として建設が進んだのに対して、元町筋沿いでは戸建ての民間耐火建築が建設された。

津居山では震災復興に際して埋め立てと区画整理が大々的に行われ、近世から明治半ばまで北前船で栄えた港の景観を大きく変えた。こうした津居山の震災復興過程は、これまでの北但大震災の復興に関わる研究では等閑視されてきており、本研究の中でも新規性の高い部分である。津居山は 1920 年代後半に行われた災害復興計画によってつくられた空間が、今も持続的に残されているという上でも日本の近代都市計画史において重要な意味を持つ。

現在の豊岡市には、約 100 年前の災害復興を契機として形成が進んだ空間が現在まで継承されている。東京や横浜では、関東大震災後のまち場の遺産の多くが既に失われてしまった。日本の近代の空間遺産としても、本研究の対象地区の空間は極めて重要である。

### （ 発 表 論 文 ）

- 石榑督和、松井敬代、ハミルトン壘、司馬麻未、菊池義浩「北但大震災復興に関する研究史と本研究の展望 北但大震災による大火からの復興にみる地域空間形成史研究 その 1」『令和 5 年度日本建築学会近畿支部研究報告集計画系』2023 年 5 月, pp. 453-456
- 松井敬代、石榑督和、ハミルトン壘、司馬麻未、菊池義浩「北但大震災復興事業前後の都市空間 北但大震災による大火からの復興にみる地域空間形成史研究 その 2」『令和 5 年度日本建築学会近畿支部研究報告集計画系』2023 年 5 月, pp. 457-460
- ハミルトン壘、石榑督和、松井敬代、司馬麻未、菊池義浩「旧豊岡町における北但大震災後の「復興建築群」について 北但大震災による大火からの復興にみる地域空間形成史研究 その 3」『令和 5 年度日本建築学会近畿支部研究報告集計画系』2023 年 5 月, pp. 461-464
- 司馬麻未、石榑督和、松井敬代、ハミルトン壘、菊池義浩「旧豊岡町における北但大震災後の「復興建築群」について 北但大震災による大火からの復興にみる地域空間形成史研究 その 4」『令和 5 年度日本建築学会近畿支部研究報告集計画系』2023 年 5 月, pp. 465-468
- 石榑督和、松井敬代、ハミルトン壘、司馬麻未、中島伸「北但大震災以前・以後の兵庫県旧港村津居山の集落空間 北前船寄港地の近現代の変容その 2」日本建築学会『2023 北陸支部研究報告集第 66 号』2023 年 6 月, pp. 377-380